Front Line フロント・ライン

閑話独言

本県の健全な発展へ

日本銀行山形事務所所長
小室　昇氏

本年６月に山形事務所長として着任し、早いもので約３カ月が過ぎました。

前任地は仙台支店であり、山形県はその仙台支店の業務区域内でしたから、仙台支店時代には、プライベートでの旅行なども含め幾度も当地を訪れておりました。温泉が大好きで、特に蔵王の日帰り温泉には大変お世話になり、おかげで肌の艶は、この歳にしては大変良く実年齢に比べて若く見られています。また、果物、特にさくらんぼ、ラ・フランス、ぶどう、すいか、メロンなどなど、どれも大好きで、実家が兼業農家であることもあって本気で果物農家に転身しようかと思った時期もあったほどです。その「温泉王国」、「果物王国」の地に勤務できているのですから、大変な幸せ者だと日々感謝しております。

さて、話を当事務所に戻しますと、当事務所は、太平洋戦争末期の昭和20年８月10日、当時の両羽銀行（現在の山形銀行）の本店建物内に「山形駐在員事務所」（昭和21年７月に山形事務所と改称）として開設されました。当時の記録によれば、日増しに戦局が悪化し空襲によって本土各地の交通、通信が次第に困難となっていく中で、地方にも必要な現金を供給し、流通させることを主な目的として、当事務所が設けられました。当時、同じ目的で設置された日本銀行事務所は全国にいくつかありましたが、東北の地では、まったく同じ８月10日に盛岡に事務所が設置されています。それから70年以上もの間、この山形の地で地域経済の発展に貢献させていただいています。

ご存知とは思いますが、折角の機会ですから改めて事務所の役割についてご紹介させていただきますと、日本銀行は、「銀行券を発行するとともに、通貨及び金融の調節を行うこと」、また「金融機関の間で行われる資金決済の円滑化を図り信用秩序の維持に資すること」をその役割としています。こうした役割の下、事務所では、①地元金融機関との間の銀行券の受払を通じて、山形県内全域における通貨の円滑な供給、流通を支えているほか、②県内の多くの企業、金融機関へのヒアリングを通じて当地の金融経済に関する調査や、日本銀行の政策・業務に関する情報提供を行っています。より具体的には、毎月の「県内金融経済概況」や四半期毎の「短期経済観測調査」（短観）を公表しています。また、こうした調査結果などをもとに地域金融・経済界の方々に講演などの場を通じて情報提供を行っています。

私どもは、現在の当地の景気については「緩やかに拡大している」と判断しています。先行きについては、アメリカの通商政策の動向などリスク要因はありますが、当面は、好調な海外経済に支えられ緩やかな拡大が続くのではないかとみています。

こうした景気判断、情報発信ができるのも、日頃、県内各企業の皆様からいただく貴重な情報（生の声）のおかげであると感謝しております。これからも日々、中央銀行として的確に業務を遂行していくとともに、より丁寧な調査、分析を心懸けてまいりたいと思います。

今月の表紙
「紅葉の山寺」

ふるさと画家・上野啓太氏作。「わが町」をテーマに、イラストでまちおこし運動を行っている「やまがたマーチング委員会」（事務局・㈱大風印刷）提供。